



特集 /

地域おこし協力隊に 広川町のこと聞いてみました

圏産業課商工観光係 ☎0943-32-1142

私は京都府の出身で、前職は藍染体験施設で取り組む大人の社会塾の運営や藍染製品の生産販売を行っていました。広川町を知ることになったのは、地域文化商社「うなぎの寝床」さんが主宰する、久留米絣の織元を巡る地域体験ツアーに参加したことです。そのときに、広川町の織元さんを訪れ、久留米絣の生産現場を知り、それを未来へつなぐとされている想いに魅せられ「この町で自身の経験を生かせれば」と思い、移住を決めました。

昨年の4月に協力隊に着任してからは、主に久留米絣のPRやイベントのお手伝いなどを行っています。また、織元さんと染めの勉強会をするなど、久留米絣に対する見識を深めているところです。

広川町は生活しやすいと感じます。自然に囲まれているのに利便性が高い「都会過ぎず田舎過ぎず」という環境も、広川町の魅力の一つではないでしょうか。

まずは久留米絣の魅力を一人でも多くの人に伝え、関係人口を増やしていきたいと思っています。そして、久留米絣だけでなく、町の魅力を感じてもらえるような体験ツアーを企画してみたいです。

久留米絣にかける想いに魅せられて



地域おこし協力隊 山口直美さん

外部からの視点で 地域の可能性を探る

皆さんは「地域おこし協力隊」をご存じですか？

これは、総務省が平成21年に開始した地方を活性化させるための制度で、地方自治体が都市地域からの移住者を「地域おこし協力隊員」として任命し、地域協力活動に参加してもらいます。1～3年間の任期中に、農業や漁業、地域の魅力PR、イベントの企画・運営など、その地域の特性を生かしたさまざまな活動を行いながら、最終的に地域への定住を図ることが目的です。現在、全国で6000人以上の隊員が活躍しており、地域の可能性を探りながら奮闘しています。

今回の特集は、広川町地域おこし協力隊として活躍されている、山口さんと染矢さんに密着し、「なぜ広川町を選んだのか？」や「広川町の資源とは何か？」などについて、外部の視点からお話を聞きました。



町のポテンシャルを生かすためには？

私は宮崎県の出身で、前職ではイベント関連のグラフィックデザインや立体デザイン、企業ブランディングの仕事に携わっていました。

まだまだ認知度が低く、どのように利用できるかななどの周知活動に努めています。交流できる創造拠点として、多くの人に有効活用してもらいたいです。

好きで、休みの日は川や山に出かけることが多く、その中で広川町を知りました。ちょうど転職を考えていた時期でもあり、仕事に対する想いやタイミング、そして協力隊で募集していた仕事内容の3つがそろい「これはご縁だ」と考え、移住を決断しました。

協力隊としての主な仕事は、「Hooku」の有効活用です。町内にある施設なのですが、6月に移住してから生活する中で、広川町は資源豊富な「ポテンシャルの高い地域」だと改めて感じます。しかし、そのポテンシャルを生かすには、デザインやPRの仕方など、クリエイティブな仕事に目を向けていく必要があります。これまでの自身の経験やデザインのスキルを生かし、広川町の魅力を最大限に伝えていきたいと思っています。



地域おこし協力隊 染矢香理さん



地域の資源を掘り起こす

地域には、全国に通用する魅力的な資源がたくさんあります。広川町にも、久留米絨やフルーツ、八女茶や古墳などの資源がありますが、ほかにも「広川ならではの」資源がまだ眠っているはずです。

外部の人にとってはとても魅力的な「磨けばダイヤモンドのように光る資源」も、地域のの人にとっては昔から当たり前のように存在するものであるが故、その魅力に気付かず、掘り起こされることがなく眠っていることも少なくありません。

そこで、外部からの視点で客観的にその資源の価値を判断し、上手に活用できる人材が必要になります。それが地域おこし協力隊です。



広川町の魅力を掘り起こす！ 協力隊が考える町の「魅力」と「資源」とは？



——お二人が考える「まだ広川町に眠る魅力や資源」とは何でしょう？

山口：広川町の一番の資源は人だと思っています。私は仕事柄、久留米絨の織元さんと接する

機会が多いのですが、個性豊かなキャラクターが魅力的だと感じます。そのため、人に着目した伝え方をしていけば、新しいアプローチができると思います。

染矢：広川町には、久留米絨の織元さんのほかに、農家さんなどの専門職の人がたくさんいます。一つの物事を追求し続ける職人さんてかっこいいですね！それこそ広川町の資源であり財産です。「モノ」ではなく「人」にスポットをあててブランディングすることで、魅力を伝えられることもあるのではないのでしょうか。

地域おこし協力隊 OB にインタビューしました

広川町の可能性を見だし、外部からの移住を決断した人は、地域おこし協力隊のお二人以外にもたくさんいます。元協力隊として3年間活動に従事し、任期後も広川町で活動されている、宿泊施設

「Orige」とアトリエ「Kibiru」を運営する、ニュー・ヒロカワ合同会社代表の山本誠さんと、探究型学習教室「irodori Study Lab」を運営する（一社）irodori 代表理事の井上涼さんにお話を伺いました。

私は神奈川県出身で、平成29年に地域おこし協力隊に着任し、家族で広川町に移住しました。自然も人も豊かなこの町は私の第二の故郷です。広川町は多くの資源に恵まれているほか、都心部からのアクセスも良く、久留米や八女などの全国的に認知度が高い地域が近隣にあるのも利点だと思います。

私が運営している、移住相談を兼ねた体験型宿泊施設「Orige」とワークショップなどを行っているアトリエ「Kibiru」は、広川町が管理している施設であり、町役場から指定管理者として選定され、施設の運営業務を代行しています。

「Orige」は、着任当初から



地域おこし協力隊 OB 山本誠さん



▲織元さんとの染色実験（Orige）

立ち上げに関わっているため、私にとっても思い入れが強い場所です。これまでに国内外問わず、たくさんのお客さまにご利用いただいています。併設している施設では「染め体験」などのワークショップも行っており、広川町の文化などを体験しながら宿泊できるのが特徴です。

「Kibiru」では、ものづくりのワークショップを行っているほか、経験豊富な常駐スタッフによる「洋裁の相談ができる日」を開催しており、丁寧なアドバイスを好評をいただいています。また、カフェとしてもご利用いただけるほか、「子どもの放課後施設」も運用していますので、ぜひお気軽にご利用ください。

私は広川町の出身で、関東や福岡市内で仕事したのち、令和2年にUターンという形で地域おこし協力隊に着任しました。広川町に戻るきっかけとなったのは、やはり故郷に対する愛着と、これまでの経験を広川町でこそ生かしたいという思いからです。

着任当初から、現在運営している探究型学習教室「irodori Study Lab」を計画していました。小学4年～高校3年生を対象としており、最大の特長は、いわゆる受験の準備をする学習教室ではなく、一人ひとりの個性に応じ、子どもの特性を伸ばす教育システムを採用していることです。すでにやりたいことがある子は、それをさらに伸ばす

ための伴走を行い、まだ見つからない子は一緒に探すところから始めます。都心部との教育格差をなくせるよう、地方に居ながら海外などで活躍している人に話が聞けたり、地域の特性を生かし、地場産業に触れる体験型の授業を取り入れたりしているのも特長の一つです。「好きこそ物の上手なれ」という言葉がありますが、まさに好きが高じてタイピングの大会で日本一になった生徒もいます。

広川町には、伝統工芸や農業などの魅力的な資源がたくさんあるため、そこに仕事をリンクさせることで雇用を創出できれば、広川町で仕事したいという人はたくさんいるのではないのでしょうか。



地域おこし協力隊 OB 井上涼さん



▲体験型授業の様子

探究型学習教室

① irodori Study Lab



住所：広川 262-2

子どもの個性を把握し、それぞれに合わせた学習法で一人ひとりの特性を伸ばす学習教室です。未経験から全国タイピングコンテストで優勝した生徒を輩出した実績もあります。

☎ irodori (井上) ☎ 070-8952-4707

つながりが価値を生むアトリエ

② Kibiru



住所：久泉 814-1

「つくる」を仕事にする人や、これからそんな仕事にしたい人に向けてオープンした、ものづくりの拠点です。初心者向けのワークショップなども開催しており、どなたでも気軽に利用できます。

☎ Kibiru ☎ 0943-24-8281



※各施設の詳細は QR コードからご覧ください。

我が家のように過ごす広川の時間

③ Orige



住所：吉常 30-2

地域と宿泊者を繋ぐパイプのような拠点であり、移住相談ができる宿泊施設です。大きなデッキと Orige に併設した多目的スペースでは、ワークショップなどのさまざまなイベントを行っています。

☎ Orige ☎ 0943-22-8122

ものづくり研究所

④ Hodoku



住所：水原 946-10

いろいろな人と交流しながら、新しい商品を開発できる施設です。フードプロセッサーやミキサー、真空パック器なども備えているため、食品の開発に最適。ワークショップなどでも利用できます。

☎ 産業課商工観光係 ☎ 0943-32-1142